

住みごこち一番・可児 — 若い世代が住みたいと感じる魅力あるまちの創造



人生で大切なとき



あの子がいつのまにか みんなに慕われる人に
 「育つものを見るのは、気持ちがいい。ぼくは育つものが好きである」 〈吉川英治全集(52)より〉

目次

- 春のかがやき 本センター会長 齋藤美智子 1
- 特集「人権文化の光彩」(標語・300字小説の入賞作品)と「28年度本センター三大ニュース」 2~3
 - 平成28年度 標語(第16回)・300字小説(第9回)
 (解説)・**応募者総数**：2704人(小学生1335人・中高一般1369人)
 (標語：2154点・300字小説：550点)
 ・**入賞作品**：37点(標語30点・300字小説7点)
- コーナー 4
 - 心のドア ● 可児ぬくもりネットだより ● ぬくもりまゆちゃん㊟ ● 啓発のひかり

- [国連]
- ① 難民の地位に関する議定書採択・50周年(1967・1・31)
 - ② 拷問・残虐等禁止条約発効・30周年(1987・6・26)
 - ③ 先住民族の権利に関する国連宣言・10周年(2007・9・13)
- 今年の人権・ホットメモリー

春のかがやき **今こそ、心のやさしさを** 本センター会長 齋藤美智子

新しい年も、矢のごとく早く過ぎようとしています。本センターも、皆様のおかげで設立25周年を無事終えました。この間人権に関する中枢としての多くの事業を遂行してまいりました。人の感性は、個々すべて違います。ゆえに、これでよいと思うことは、一つもありませんが「継続は力なり」と思いながら、「人間が人間らしく幸せになるため」の啓発に勤しんでおります。世相に、もう少し穏やかさが欲しいもの。安心して静かに人生を語るゆとりが欲しいもの。何があろうとも明日をめざして、どこまでも走り通すことが本センターの使命であると思っています。「市の方針」の安気・安心・元気・安全づくりの根本こそ人の「心のやさしさ」であると思います。

- [国内]
- ① アイヌの文化振興法施行・20周年(1997・7・1)
 - ② 人権教育・啓発基本計画閣議決定・15周年(2002・3・15)
 - ③ 身体障害者補助犬法施行・15周年(2002・10・1)
 - ④ 部落差別解消推進法成立・1周年(2016・12・9)

特集

人権文化の光彩 平成二十八年度

人権啓発入賞(標語)

第16回

〔選考・関係者と他機関の代表による〕

2,154作品より選考

【最優秀賞】

なぜやるの？
あなたがされたら いやなのに
鈴木 悠生(中学校一年生)

【優秀賞】

しないさせないゆるさない
いじめの始まり 悪ふざけ
橋爪 恒輝(小学校五年生)
気付いたら かけてあげよう 一丈夫
金子 大樹(小学校五年生)
やっちゃダメ 仲間はずれも いじめだよ
渡辺 萌唯(小学校六年生)
助けてよ 見ているあなたも 共犯者
濱口 瑚々(中学校三年生)
見てないで 「やめろ」と言える その勇氣
田上 大貴(中学校三年生)

【入選】

やさしさと もらってうれしい おもいやり
水木 友菜(小学校五年生)
「だめだよ」と はつきり言おう 仲間なら
渡邊 優佳(小学校六年生)
打ちあけて 悲しい世界 抜けたぞ
谷口 妃乃(中学校一年生)
ふりしほれば あの子を助ける その言葉
いじめをなくす あなたの勇氣
東 歩美(中学校三年生)
声かけよう 一人であらずむ あの人に
秋田 陽菜子(中学校三年生)

やめよう 消そう いじめの火
飯田 凌矢(中学校二年生)

いじめはね 一生心に 残るきず
三戸 輝(小学校五年生)

あなたの目 見て見ぬふりの 道具じゃない
永治 琉貴(小学校六年生)

孤独の子 一人にせずに 声かけよう
小久保 一誠(小学校六年生)

「たすけてよ」 僕には届いた 君の声
今 晴希(中学校三年生)

ありがとう 人からもらったうれしさを
次は僕から 声かけよう
永井 瑛剛(中学校二年生)

ありがとう ほらまた笑顔が あそこにも
若尾 侑生(中学校二年生)

いじめはね 友達へらす あくまたよ
三宅 真紗子(小学校六年生)

勇氣持ち ちゃんとやろうよ 「だめだよ」と
井戸 美来(小学校六年生)

一人ぼっち いない教室 明るいクラス
蟹見 深風(小学校五年生)

障がい者 君のその手で 支えよう
小林 大暉(小学校六年生)

だいじょうぶ？ あなたの勇氣が 笑顔の始まり
上野 有梨(小学校六年生)

だいじょうぶが みんなで守るよ 君のこと
榊原 瑞姫(小学校五年生)

大丈夫 心配ないさ ぼくがいる
山中 利駆(小学校五年生)

価値観は ひとそれぞれだ 差別ダメ
中島 理仁(小学校六年生)

相手に対する優しさか いじめを無くす かぎになる
辻 麻衣美(小学校六年生)

こわくても はつきり言おう 「やめてよ」と
山本 悟(小学校六年生)

優しい心で寄りそおう いじめをなくす 第一歩
後藤 晃希(小学校六年生)

さしのべた その手がどれだけ うれしいか
生田 康二郎(中学校一年生)

人権啓発入賞

【300字小説】

第9回

〔選考・関係者と他機関の代表による〕

550作品より選考

【最優秀賞】

「ねえ。なんでそんなこというの？」
ちよっとした事から始まった言い合い。思わず言ってしまった、「きらい」の三文字。向こうが悪いんだ。自分は悪くない。そう思ったから何も言わずに帰ってきてしまった。
次の日。休日だから会わなくてもいい。少しほっとした時に届いたメール。そつと開くと、そこには「ごめん」の三文字。涙が出てきて、同時にすこく後悔した。私が言った三文字と、友達と言った三文字。同じ数なのにこんなにも気持ちが変わるなんて。「ごつちこそごめん。本当にごめんね。」これからは気を付けよう。ほんの少しの言葉で相手を傷付けてしまわないか。考えよう。言われてうれしい言葉はなにか。

玉野 真衣 (中学校二年生)



(28年度) 三大ニュース (実績)

11/20 「いじめ防止自治体サミット」支援

- ① 標語・300字小説入賞作品展開催 (アーラ主劇場ホワイエ)
- ② 冊子の発行＝標語・300字小説入賞作品集 (参加者・他 1,000名に配布)



12/5 人権教育優秀校表彰式 (本センター設立 25周年記念) (人権作品投稿・人権行事への総合評価)



中部中学校 (中学校の部)

南帷子小学校 (小学校の部)

年間 学校への支援

- ・人権本巡回制度 (8周年) - 子ども・教師用各約 30冊
- ・標語 (16周年)、300字小説 (9周年) の募集 2,704点の応募有り (過去最多)
- ・子どもめくもり教室 (5周年)
- ・人権しおり (8周年)
- ・(教師) 人権講話 (3回/年)



【優秀賞】

山崎 優菜 (中学校二年生)

小さなけんから始まった私へのいじめ。あれからもう一カ月がたった。私は誰にも相談できずいじめに絶え続けている。大好きで信じていた親友にも見捨てられて心も精神もボロボロだ。ただただ、何もできずに一日が過ぎていく。もう私に居場所はないのかな、そんなことを考えながら家に帰る。すると、「おかえり」いつも仕事でいるはずのないお母さんが帰ってきていた。いつもならこんな汚れた私を見ることがないがとうとう見られてしまった。怒るかな？悲しむかな？そんなことを考えるとお母さんがただ泣きながら抱き締めて「ごめんね」と言い続けた。居場所がない人なんてないんだ。子どもは、産まれたときから両親に愛されているから。



【優秀賞】

大山 樹優人 (中学校二年生)

夏休みが明け、やっと宿題を終えた僕は、眠い目を擦りながら教室の扉を開ける。そんな感じが懐かしく、どこなくうれしかった。しかし、「おはよう」誰もあいさつをしてくれない。いつもと違う風を感じ、友達の突き刺さるような目が痛かった。一瞬でわかった、僕の番だ。それは、いじめの順番である。誰かをいじめることで、団結をする。誰でもいい、つまり順番だ。僕は、教室の窓を開け、グラウンドに向かって叫んだ。「今度は、僕の番か。次は誰の番だ。こんな意味ないよ。」僕の声が教室に入ってくる風に乗ったのか、教室内で「おはよう」の言葉が鳴りやまない。僕はいつもの学校生活に戻った。



※挿絵は入賞作品をもとに本職員が作成しました。

【入選】

小関 由花 (中学校三年生)

「友達がいらない。一人がほしい。」最近、僕の妹がそんなことを言っている。家で話を聞いたところ、ひとみりの妹は、なかなか周りの子に話しかけられず、ずっと一人ですごしていたらしい。ついには、学校を休むようになってしまった。僕は妹に学校へ行くよう言葉をかけたが、部屋から何日も出てこないことが続いた。

そんなある日、妹と同じ学校の制服を着た二人の女の子が家に来た。妹へ、クラスからの手紙とビデオレターを届けに来てくれたそだ。妹と一緒に見てほしいと言われたので僕も見た。内容は、妹が学校に来ることをみんな待っている。妹は、泣きながら笑っていた。

【入選】

風間 未来 (中学校二年生)

普通とはどういう事だろうか。同じクラスの人は、あの子は変だ。普通じゃないと言っ。でも、普通でいるという事が私はどういう事か分からない。あの子は誰に何を言われても笑っている。でも、本当に心から笑っているのだろうか。みんなが言う普通じゃないという事は、その子の個性であり、みんなには無い物だと私は思った。自分と違う物を普通じゃないと言っ。否定するのはなにか、違う気がする。休み時間、あの子に声をかけてみようと思った。

「ねえ、次の移動教室、一緒に行こうよ。」あの子は少し驚いて、少しの間の後、うん、と笑ってうなずいた。その笑顔は、他のみんなと何も、変わらないように思

えた。

【入選】

西川 ひかり (中学校一年生)

あの子は話すことができない。だからグループを作る時も、「障がいのある子は」といつて仲間はずれにしてしまっ。いつも、「かわいいそ」と思っても行動には移せない。

そんな毎日が過ぎていた時、店で話さなくて困っている障がい者を見かけた。すると、同じ年ぐらいの子が助けるのを見た。「あんなふうに助けるのってすごい」「私もあんなふうになりたい」。私は、すなおにそう思っ。次の日、私はあの子に声をかけた。「おはよう」。すると、あの子も「おはよう」とかえして、笑顔で見せてきた。初めて見るその笑顔を見て、とても嬉しくなっ。て私は言っ。「今日から友達だね！」

【入選】

横山 祥子 (中学校二年生)

私の友達の手が不自由です。でもその子は私達と一緒に様々な活動をしている頑張り屋さんです。ある日の給食後、彼女は菓子の袋をあげたらそうにしていました。私はその日給食当番で、早く食器を片付けたいという理由から、「あけてあげようか。」としました。しかし彼女は「いいよ。自分でやりたいから。」と、頑張ってあけていました。私はハッと気付きました。代わりにやってあげることは彼女の為にならない、彼女が自分でできるように、手助けしたり、待たしたりする事が大切だと。弱い立場の人を助ける為には、代わりにやる事がいつも正しい事ではなく、その人が何を望んで、どの様にして欲しいのかをよく考えて、私は行動していきたい。

決して負けない 母と子の愛

心のドア
を叩いて
真のことは？



【取材記事です】

★これは、日米の世相に翻弄され、米軍人と結婚した日本人女性と、2人の息子と共に、強く生きてきた感動の実話である。

★その女性は、2人の息子を生き、夫の転属で米国テキサス州に渡った後、2人は離婚した。残された2人の兄弟は、その悲しみを小さな心で骨の髄まで感じたという。

★その後、母と息子達は、ニューヨークに移った。母は、日本人学校でアルバイトをしながら、大都会の片隅で、明日も分からない貧しい生活をしてきた。兄はくじけずに学校に通いながら、雑誌のモデルをやり母と弟を助けていた。

★そんな時に母はガンに侵され闘病生活となった。弟も、摩天楼の谷間で寒暑の日も新聞販売をして、母を助けた。母も病魔と闘いながら仕事をした。

★母は兄弟に言う「ここでは、勉強しないと、生き残れない」と。ゆえに兄弟は、僅かな稼ぎで、ひと欠けらのゆとりもない中、勉強に励んだ。

★兄は、ハイスクールを最優秀の成績で卒業、認められ、ニューヨーク大学に特進入学した。また学業と並行して弟のハイスクールの学費を稼ぐため、モデルをやり支え続けた。

★やがて大学を成績優秀で卒業。世界的な大手N証券取引所に就職し活躍。その後、コンピュータの世界的なハードウェアS社に移る。そしてさらに請われ、シアトルの世界一のソフトウェア会社M社に主幹幹部として移籍して、今があるという。

★一方、弟も優秀な成績を収め、ペンシルバニア大を卒業後、コーネル大の理学関係の大学院博士課程を修了し、国の研究所で働き博士号を取得した。昨年からは研究者として、日本の有名なR研究所に派遣され研究しているという。

★母の病氣も高度な治療を受け完治して、今は、多くの人の生活相談をし活躍している。

★最終戦70年余を過ぎ、米国の情勢変化の今、その母と子がカリフォルニアにあるユニバーサル・スタジオ前で写真を見せてくれた。息子と笑っている、その背の小さな母の顔は、苦労したことなど感じさせない所願満足の笑顔であった。

＜感想＞ 誰がこの親子を見て、あの大都市の中で生き抜いたと思うのであつつか、辛苦を克服しぬいた人ほと立派な人はいないと思つた。

まゆちゃん 23

〈どうしてこのまちにいるの？〉
作：多々文/画：miho



(本作品は、全て本職員でつくられています)

心の響き 可児ぬくもりネットだより

今週の
ビタミンから

(本センターホームページ)

●2月4日の立春になっても、季節の移ろいは、まだ厳寒である。草木も春の日差しを待ち遠しく、その時を待っているようだ。あせ道の「露のつら」も表皮を脱ぎ青い頭をだしている。草木も昆虫も、また人も秋から冬にかけては耐え忍び時。そこから身を守るつと冬籠もりで養生をして、また生きよう地球の上昇リズムと合わせるのが春である。生きるということとは、万物が、人も含めてそれぞれの生き方を模索して、それぞれが違った難難な道を耐えて乗り切ろうとしていく事象なのである。

●生き物の寿命も、同じ種類でも死の時間がすべて異なることからまた生きるということとは、日々初めの事象との遭遇の連続でもある。

●日々変わる事である。人の肉体をつくる約60兆の細胞も弱っていくと常に新しく入れ替わってくれているという。1日で4分の1の15兆もが替わって命を保つそうだ。

●この細胞はどのようについに体外に排出されるのかと思つていたら、そうではなく、細胞自身が蘇生させて生かしていることをノーベル賞を受賞した大隅良典氏が明らかにしたのである。「オートファジー」という細胞の働きで、自らを食べべて新たな細胞を再生しているのだという。人間だけでなく生きとし生けるものに通じる不思議な生命保持の働きなのである。

●命あるものが、如何ように永く生きられようと、いつかは死を迎えるのである。生まれて育ち成熟して老いを迎えていくリズムは、替えようが無いことではあるが、そのリズムの手のひらの中で、刺激による活連まで生きることの大切さを示唆したことも、細胞の働きの再生発見の偉大な点ではないだろうか。春は、活性の時でもある。

草萌える春（生きること）の感慨

今週S.T.めぐみ
発行日：2014年2月7日 改編

「啓発のひかり」

★春は息吹の候。

★庭の隅の「雪割草」が顔をだし咲き始めました。身を陽にかざし紫色が映えています。見られなくとも、じつとそこで役割を果たそうとしています。

★もつとすく4月、入学・進学・就職など新しい経験をする人、また永き仕事人生に挨拶をして一服する人など、人それぞれ違った思いを持って生きていきます。

★特に若者は、成長することで、年々違う世界が現れます。新しい交流ができます。一緒に事をなすことは、不思議な縁です。

★必然と思えば一層深い縁を感じます。偶然でも「めぐり合せ」の絆をつくむ機会となります。

★人権は、「個性を大切にしながら、皆が幸せに生きていくこと」を目指します。

★一昨年、国連で採択された持続可能な、あらゆる目標(SDGs)のテーマ「だれ一人取り残さない！」の精神は、世界情勢がどう変わるかが、人権活動の目指すテーマであると思えます。

(編集者：川手靖猛)